

## テノール・アリア「運命は恋する者に」K.209 と「従いかしこみて」K.210 —— 対応するオペラを調査する（その2） ——

野口秀夫

### 1. はじめに

犬輔：今回は<sup>注1</sup>テノール・アリア「従いかしこみて Con ossequio, con rispetto」K.210 が、どのオペラへの挿入／代替アリアなのかというテーマを設定しました。自筆譜に自筆で 1775 年 5 月と書かれていることから、その頃ザルツブルクに滞在していた旅回りのイタリア一座であるエミーリオ座が上演したオペラ・ブッフアへの挿入／代替アリアではないかということでした。

鳥代：ニコロ・ピッチニのブッフア作品《うかつな男または幸運な賭博師》（台詞：G.ピエートロセリーニ）の第二幕第 20 場への挿入アリアとして作曲されたとする従來說があるのですが、そこで歌うのがティモテオ役のバスであり、K.210 がテノールのために書かれているのと矛盾することを指摘しました。

教授：そこで K.210 を挿入/代替できる他のオペラ・ブッフアを探したが該当作品が見つからないというのが前回の結果であった。時間も少なかったので、引き続き諸君たちへの宿題でしたが、その後ゆっくりと検討できたはずだ。今回はその有力候補を紹介してもらいたい。

### 2. 1775 年にエミーリオ座がザルツブルクで上演したオペラ・ブッフアの候補

鳥代：今回は K.210 の歌詞の一部と共通する語句が出てくるリブレットを先ず探し、初対面の登場人物が名刺代わりの「カタログの歌」を歌うことから賢人と思ひ込まれ、敬意の挨拶を受けるという設定を探しました。しかし、そのようなアプローチでは求めるブッフア作品は見つかりませんでしたので、今回は別の方法を採らざるをえません。

犬輔：その方法は、全く感覚的なのですが、一瞥して何となく気になった作品を捉えて、翻訳し、K.210 が当てはまる部分があるかどうかを調べていくというやり方です。早速気になった作品が一つありましたので鳥代さんと二人で何とか報告してみようと思います。

教授：その作品は何で、そして何が気に入ったのかね。

犬輔：「気に入った」ではなく、「気になった」です。

鳥代：アントーニオ・パロンバ Antonio Palomba (1705-69) 台本・ジョヴァンニ・パイジエッロ Giovanni Paisiello (1740-1816) 作曲の音楽滑稽劇《おしゃべり屋 Il Ciarlone》(1764 ボローニャ初演) という作品です<sup>注2</sup>。登場人物に“後見人 il Tutore”と“後見されている孤児の娘 la Pupilla”がいるのが気になった理由です。

犬輔：かつて、ノットウルノ K.346 の歌詞の出典としてアンジェロ・ルンジ Angelo Lungi 台本・フランチェスコ・サヴェリーオ・ガルツィア Francesco Saverio Garzia (1730-1809) 作曲の三声の音楽笑劇《後見されている娘 La Pupilla》(1755 ローマ) (登場人物は 3 人) を調査<sup>注3</sup>したとき以来、後見人と被後見人 (孤児の娘) の組み合わせが気になる存在だったのです。

鳥代：同名の 3 幕の喜劇『後見されている娘 La Pupilla』がカルロ・ゴルドーニにもあり、1757 年にコメディ・デッラルテのために書かれています (登場人物は 7 人) <sup>注4</sup>。

犬輔：さらにジュゼッペ・アヴォッサ Giuseppe d' Avossa (1708-96) 作曲の《後見されている娘 La Pupilla》(1763 ナポリ) があります (登場人物は黙役を入れて 8 人) <sup>注5</sup>。

鳥代：《おしゃべり屋 Il Ciarlone》(1764 ボローニャ) は上記アヴォッサと基本的には同じ内容のリブレットと言ってよいと考えられますが、それ以外のリブレットとは異なります。

教授：これらの複雑な状況についてはこう説明されている<sup>注6</sup>。「《おしゃべり屋 Il Ciarlone》の公演履歴は異常に複雑である。実際の初演は 1763 年にナポリで《後見されている娘 La Pupilla》という題名で行われ、その後、高イタリア語版 (現在は《おしゃべり屋 Il Ciarlone》と呼ばれている) が 1764 年から 1765 年にかけていくつかの劇場で上演されたが、おそらく最初にファエンツァで上演された。1764 年のボローニャ版は、パイジエッロのオペラのリストによく挙げられる。ヴィーン版のベースとなったと思われる 1765 年のヴェネツィアでの公演も重要な意味を持つようだ。アヴォッサとパイジエッロのヴァージョンが正確にどのようなものであったか、つまり、翻案と新しい作曲の境界がどの程度曖昧であったかについては、さらに明確にする必要がある。ヴィーン公演の正確な分類は、資料不足のため困難である (ヴィーン国立図書館の楽譜はヴィーンの台本と一致しない)。また、ブラウンシュヴァイクの楽譜の起源もまだ明らかではない」。つまりヴァージョンの違いについては深追いしないことだ。

鳥代：そんな状況ですので、今回翻訳したのは初演版ではなく《おしゃべり屋 Il Ciarlone》(1767 マントヴァ) のリブレットです<sup>注7</sup>。テキストデータを手に入りやすかったというのがその理由です。もちろん幾つかの箇所では初演版との間で異同があることは承知の上です。

### 3. アントーニオ・パロンバ作 音楽滑稽劇《おしゃべり屋 Il Ciarlone》

犬輔：翻訳は別ファイルにしました<sup>注8</sup>。粗筋を見ておきましょう。

鳥代：父親の遺言により、多額の遺産を相続した娘（チェレスティーナ）は、成人するまで後見人（ファヴォーニオ）をつけられ、成人になった暁にはその後見人と結婚するという定めになっていました。ところが、後見人がお人好しのため、財産目当てに後見人の親戚たちが居候して浪費し、財産管理人は不正を働きます。彼女はそれに気づき反撃を開始するのでした。そこにファルファローネ博士と称する人物が近づき、助言しますが、下心を見抜かれた博士は邪陰に扱われ、侮辱されたと思い、反対勢力に加わります。

#### 3.1 テノール・アリア「従いかしこみて」K.210 の挿入先

犬輔：ぼくたちの検討結果によると K.210 の挿入可能と思われる候補箇所は、ずばり言いましょう、第一幕 第 4 場の最後です。

ATTO PRIMO SCENA IV. <i>Cortile.</i> <i>D. Favonio, e il Dottor Farfallone.</i>	第一幕 第 4 場 中庭。 <i>D. ファヴォーニオとファルファローネ博士。</i>
Dott. Sior Don Favonio mio veneratissimo. Fav. Mio Signore, e Padrone offervandissimo. Dott. Vi fo un milion d'inchini. Fav. Dottore m' affaffini Con tante riverenze. Dott. Fo il mio dover. Fav. (Oh che Dottor seccante!)	博士 尊敬するドン・ファヴォーニオ卿。 ファヴォーニオ 私の主人、そして最も慈悲深い支援者よ。 博士 私はあなたに百万回頭を下げます。 ファヴォーニオ 博士、あなたは私に何度もお辞儀をして 挨拶してくれますね。 博士 私は義務を果たします。 ファヴォーニオ (ああ、なんて迷惑な博士なんだ！)
Dott. Deggio servirla a nulla? Fav. V'ho da parlar della Pupilla mia. Dott. V'ascolto, ma vi prego ad esser breve. Fav. Si Signor: mi spiego in brevis oratio. Dott. Vi dico ciò, perch' ho molto che fare. Fav. Io mi sbrigo. (Costui è il confidente Di Celestina; esso la può quietare.) Dott. (So quel, che passa colla sua Pupilla. Di lei mi vuol parlare. A me conviene Nulla seco concludere, se prima Non favello con quella.) Fav. Sappia, Signor Dottore...	博士 何かお役に立つことがありますか？ ファヴォーニオ 私の被後見人についてですが。 博士 聞いていますが、簡潔にお願いします。 ファヴォーニオ はい、では簡単に説明させていただきます。 博士 わたしはやるべきことがたくさんあるんです。 ファヴォーニオ 急ぎましょう。(彼はチェレスティーナの親友であり、彼女を落ち着かせることができる)。 博士 (彼の被後見人に何が起こるかは知っている。 彼は彼女について私と話したいという。まず彼女 と話をしなければ、彼女と何かを結論付けるのは 私にとって都合が悪いのだ)。 ファヴォーニオ あのね、博士さん…
Dott. Vi prego che tronchiate Le parole superflue, e diate al chiodo. Fav. Ella già fa... Dott. Io non so nulla affatto. Fav. Io dico ... Dott. Dico, dico, E mai non dite nulla. Fav. La Pupilla...	博士 余計な言葉を省いて 本題に入ってください。 ファヴォーニオ 彼女はすでに… 博士 全然分かりません。 ファヴォーニオ 言いましょう… 博士 私が言っても、言っても、 あなたは何も言わない。 ファヴォーニオ 被後見人は… 博士 尊敬するご主人、 簡潔に述べることをお勧めいたします。 ファヴォーニオ 尊敬すべきご主人、 どうか沈黙して頂きたいお願い申し上げます。
Dott. Signor veneratissimo La brevità vi sia raccomandata. Fav. Signor veneratissimo Vi prego, e vi scongiuro a farvi muto.	

<p>Dott. Spicciatevi. Fav. Lei sa qual sia l'amore, Che m'arde il cor per la Pupilla mia. Dott. So tutto, e vi compiangio. Fav. Ma perchè? Dott. Perchè ho letto in mille Autori, Che Amore è un morbo pessimo. Fav. Al mondo è un morbo comune. E così... Dott. „Amor per lo tuo calle a morte vassi. L'Autor è Dalla Casa. Fav. Che ho da far della casa? Uditemi, e così... Dott. „Amore è cieco , e non può il vero scorgere. Jacopo Sanazzaro. Fav. Sì, Signor, sappia ch'io... Dott. „Sopra un carro di fuoco un garzon crudo. Petrarca famoso. Fav. (Il diavol ti porti.) Volete udirmi, o no? Dott. „<i>Res est solliciti</i> „<i>Plena timoris amor.</i> Disse Ovidio. Fav. (O schiatta, o crepa glie la voglio dire.) Avete da sapere... Dott. „Necessità d'Amor legge non ave. Il Cavalier Guarino. Fav. Che la Pupilla mia S'è fatta una superba, e mi maltratta... Dott. „Il crudo Amor di lagrime si pasce. Torquato Tasso... Fav. A lei dunque parlate... Dott. Di più il caro Signor veneratissimo... Fav. Di più Signor Dottore seccantissimo... Dott. Il Mantuan Virgilio Nel quarto dell'Eneide Sciamò: <i>improbe Amor.</i> Fav. In mente devi imprimerle, Ch'è una vergogna massima Trattar così il Tutor. Dott. E disse ancora Plauto: Fav. Che s'io poi monto in furia. Dott. <i>Amor, amara dat...</i> Fav. Lei dica, mio Signore... Dott. Catullo con Properzio... Fav. Oh che ti venga il canchero.</p>	<p>博士 急いで。 ファヴォーニオ 彼女は、私の被後見人に対する私の心を燃え上がらせる愛が何であるかを知っています。 博士 私はすべてを知り、あなたを哀れに思います。 ファヴォーニオ しかし、なぜ？ 博士 なぜなら、私は何千人もの著者から、愛は恐ろしい病気であると学んだからです。 ファヴォーニオ それは世界中でよく見られる病気です。それで... 博士 「愛よ、私はあなたの死への道を歩みます」。 著者はダッラ・カーザです。 ファヴォーニオ 私はそのカーザ [家] と何の関係がありますか？ 聞いてください、それで... 博士 「愛は盲目であり、真実を見ることができない」。 ジャコボ・サナッツァロです。 ファヴォーニオ はい、承知しておりますが... 博士 「火の戦車に乗った未熟な少年」。 有名なペトラルカです。 ファヴォーニオ (悪魔があなたを連れて行くぞ)。 私の話を聞きたいですか、聞きたくないですか？ 博士 「愛とは落ち着きのない 恐怖に満ちたものである」 オヴィディウス曰く。 ファヴォーニオ (死ぬか、くたばるかの違いだと彼に伝えたい)。 知っておくべきことは... 博士 「愛の必要性に法則はない」 騎士グアリーノ。 ファヴォーニオ 被後見人が傲慢になって 私を虐待するようになった... 博士 「粗野な愛は涙で満たされる」 トルクァート・タッソ... ファヴォーニオ それで彼女と話してください... 博士 さらに親愛なる最も尊敬すべき主人よ... ファヴォーニオ さらに博士さん、とても迷惑です... 博士 『アエネイス』第 4 巻の マントヴァのウェルギリウスはこう叫びました。 アモールを騙せ ファヴォーニオ 後見人をこのように扱うのは 非常に恥ずべきことだということを 彼女に強く印象づけなければなりません。 博士 そしてプラウトゥスは再びこう言った。 ファヴォーニオ すると私は激怒するのです。 博士 愛、苦いもの... ファヴォーニオ 彼女は言います、私の主人よ... 博士 カトゥルスとプロペルティウスは... ファヴォーニオ ああ、恋の病に罹ってしまえばいい。</p>
---	---

Dott. Disser lo stesso ancor... <b>Con ossequio, con rispetto</b> <b>Io m'inchino e mi profondo</b> <b>A un sapiente sì perfetto,</b> <b>Che l'ugual non v'e nel mondo.</b> <b>E l'eguale non verrà.</b> <b>(Per l'orgoglio, e l'ignoranza,</b> <b>Per la gran bestialità)</b> Fav. Voi siete un seccator.	<div style="border: 2px solid black; padding: 5px; transform: rotate(-15deg); display: inline-block;">K.210</div>	<b>博士</b> 彼らもまた同じことを言いました… <b>敬意と尊敬の念をもって</b> <b>深々とお辞儀をします、</b> <b>世界に並ぶ者がいないほど</b> <b>完璧な賢者の前では。</b> でも、もう同じことではないでしょう。 <b>(傲慢と無知、</b> <b>そして愚かさのため)</b> <b>ファヴォーニオ</b> あなたは迷惑な人です。
--	---	---

(退場)

教授：確かに博士は登場するとすぐに「あなたに百万回頭を下げます」と言っている。しかし、愛に関する文学作品の著者をカタログのように羅列披露するのは博士側であるから、物知りの賢者は博士自身ではないのかね。

鳥代：いいえ、賢者は博士でも、ファヴォーニオでもありません。ダッラ・カーザ、ジャコポ・サナツァロ、ペトラルカ、オヴィディウス、騎士グアリーノ、トルクアート・タツソ、マントヴァのウェルギリウス、プラウトゥス、カトゥルスとプロペルティウスなどリストアップされた著者たち（複数）のような人（単数）のことを賢者と言っているのです。

犬輔：そして、「もう同じことではないでしょう。(傲慢と無知、そして愚かさのため)」というのはファヴォーニオに対して、「もう私 [博士] は賢者に対すると同じような尊敬と敬意の念を込めたお辞儀をあなたに対してすることはないでしょう (何故ならあなたが傲慢、無知、そして愚かだと分かったから)」ということだと思います。

鳥代：博士は被後見人チェレスティーナに財産維持のアドヴァイスを依頼されているため、その後見人であるファヴォーニオに挨拶しに来たという場面で、ファヴォーニオが頼りなく、おっとりした性格ですので、博士は与しやすい相手と考えたというアリアなのでしょう。

教授：ところで K.210 はテノールのアリアだ。博士がテノールなのかどうかは確認したかね。

犬輔：はい、1767 年マントヴァ上演における博士役はフランチェスコ・トレッリ氏 Il Sig. Francesco Torelli でした。この歌手はテノールで間違いありません。

教授：諸君たちの報告を聞いていると矛盾はないようだ。音楽滑稽劇《おしゃべり屋》の第一幕第 4 場を K.210 が挿入されるオペラの候補として認めよう。

鳥代：さらに博士とチェレスティーナの会話は以下のように進みます。第一幕第 7 場です。

ATTO PRIMO SCENA VII. <i>Celestina, e poi il Dottore.</i>	<b>第一幕</b> <b>第 7 場</b> <i>チェレスティーナ、そして博士。</i>
Cel. Veggio che faccio troppo; ciò mi giova Per fargli prender sesto, e ch' apra gli occhi Contro quei ladri, che gli stanno intorno. Dott. (Ecco qui Celestina. Io la coltivo, Perch'è ricca di molto. Bramerei Di farla Sposa mia se lo potessi. Basta, tenterò l'acqua.) Cel. (Ecco il Dottore. Questo è un uomo di garbo. Egli fu quello, Che in ciò m'ha consigliata.) Dott. (M'ha veduto.) Cel. Signor Dottor, che fa? Dott. Veneratissima Mia Signora son qua per riverirvi. Cel. Anzi... Dott. Ed a dedicarvi Tutti gli ossequi miei. Cel. Anzi... Dott. Veneratissima Mia Signora, i suoi cenni mi son legge.	<b>チェレスティーナ</b> 私はやりすぎていることに気づいています。 これを彼 [ファヴォーニオ] が自制心を取り戻し、周囲にいる泥棒に気付くのに役立てましょう。 <b>博士</b> (チェレスティーナだ。私が育てた。 彼女はとても裕福なので、憧れる。 できれば、私の花嫁にしたい。 さあ、試してみよう) <b>チェレスティーナ</b> (博士だわ。 この人は優雅な人。彼こそが、 この件で私にアドヴァイスしてくれました) <b>博士</b> (こっちを見ているぞ) <b>チェレスティーナ</b> 博士さん、何をしているんですか？ <b>博士</b> 最も尊敬する 女主人様、あなたに敬意を表すために参りました。 <b>チェレスティーナ</b> とんでもない... <b>博士</b> そしてあなたに 私のすべての尊敬を捧げます。 <b>チェレスティーナ</b> とんでもない... <b>博士</b> 最も尊敬する 女主人様、あなたのご指示が私にとっての法です。

<p>           Cel.            Anzi...            Dott.            Veneratissima            Mia Signora lei fa....            Cel.            Veneratissimo            Mio Signore s'ella vuol sol parlare,            La lascio, e me ne vado.            Dott.            Ma voi...            Cel.            Veneratissimo            Signor con tante ciarle            Non concludete nulla.            Dott.            Ma voi...            Cel.            Veneratissimo            Troppo avvezzo a ciarlare, dite sempre            Un mondo di spropositi, e ancor d'errori,            Vizio comun di tutti gli Dottori.            Dott.            Coll'istesse armi mie mi fate guerra!            Cel.            Uditemi, o men vado.            Dott.            Da' labbri tuoi dipendo.            Cel.            Io feci col Tutore...            Dott.            Il mio consiglio...            Cel.            Sì Signore, l'ho detto...            Dott.            Che comandar dovete in questa casa.            Cel.            Sì Signor, l'ho...            Dott.            V'avete            Fatto dare le chiavi dei forzieri?            Cel.            (Che ti caschi la lingua!)            Dott.            Detto, che non volete più sposarlo?            Cel.            Signor, buon dì... (vuol partire.)            Dott.            Aspettate; non parlo più.            Cel.            E state zitto.            Dott.            Sto zitto.            Ma lasciate ch'io dica            Un'altra paroletta, e poi parlate.            Cel.            Dite pur. (Oh che flemma!)            Dott.            Voglio saper s'avete a Don Favonio            Detto che non volete più sposarlo?            Cel.            Anzi gli ho detto ch'io sposar lo voglio.            Dott.            Avete fatto male.            Cel.            Perché?            Dott.            Perché un sciocco come lui            Non merta il vostro amore.            Cel.            Ei mi va a genio; e poi il Genitore            Così mi comandò nel Testamento.         </p>	<p>           チェレスティーナ            とんでもない...  <b>博士</b>            最も尊敬する            女主人様をご存知の通り...            チェレスティーナ            最も尊敬すべき            閣下、もしただ話したいだけなら、            私は立ち去ります。  <b>博士</b>            でもあなたは...            チェレスティーナ            最も尊敬すべき            閣下、そんなにおしゃべりしては            何も達成できませんよ。  <b>博士</b>            でもあなたは...            チェレスティーナ            最も尊敬すべき            あなたは、おしゃべりに慣れすぎていて、いつも            ナンセンスな世界、時に間違いも言います。            これはすべての博士に共通する悪癖です。  <b>博士</b>            あなたは私と同じ武器で私に戦いを仕掛ける！            チェレスティーナ            聞いて下さい。さもなくば私は行きます。  <b>博士</b>            私はあなたの唇を頼りにしていますよ。            チェレスティーナ            私は後見人と...  <b>博士</b>            私のアドヴァイスは...            チェレスティーナ            はい閣下、私は言いました...  <b>博士</b>            この家であなたは何を命令するのですか？            チェレスティーナ            はい閣下、私は...  <b>博士</b>            あなたは            宝箱の鍵を手に入れましたか？            チェレスティーナ            (あなたの舌が抜けますように！)  <b>博士</b>            それで、もう彼とは結婚したくないんですか？            チェレスティーナ            閣下、さようなら... (帰ろうとする)  <b>博士</b>            待ってください。もうしゃべりません。            チェレスティーナ            そして静かにしてください。  <b>博士</b>            私は静かです。            しかし、あと一言だけ            少し話しましょう。            チェレスティーナ            さあ言ってください。(ああ、なんと冷静な！)  <b>博士</b>            ドン・ファヴォーニオにあなたは            もう結婚したくないと言ったのですか？            チェレスティーナ            実際は、彼と結婚したいと言いました。  <b>博士</b>            あなたは間違っています。            チェレスティーナ            なぜ？  <b>博士</b>            彼のような愚か者は            あなたの愛に値しないからです。            チェレスティーナ            彼は私にぴったりです。そして親が            遺言の中で私にそう命じたのです。         </p>
---	--

<p>Dott. Ci sarebbe per voi miglior partito. Cel. Che partito? Dott. Un Dottore amico mio V'ama Cel. Ma il Dottore chi è? Dott. Sono quell'io... Cel. Voi... Come? A me? <i>(con isdegno, ed il Dottore si confonde.)</i> Dott. Son io ch'ho l'incombenza Di parlarvene. (Uh com'è inviperita!) Cel. Voglio tosto saper come si chiama. Dott. Non vi prendete collera? Cel. Signor no; n'ho piacer. Ecco ch'io rido. Dott. Egli è il Dottor Far... fal... Cel. Come? Dott. Me ne son già dimenticato. (Io mi vedo imbrogliato.) Cel. Se il nome non sapete, Perciò nulla m'importa. A nome mio Ditegli, che un Dottore come lui Io lo tengo alla stalla. Dott. Gli Dottori? Cel. Così è; mai questa razza A genio non mandò. Dott. Gli Dottori? Cel. L'ho detto. Sempre presso di me sono in ridicolo. Dott. Gli Dottori? Cel. Sì, Signore. A lui dite, Che se saprò chi è, dal mio Volante Lo farò bastonare. Dott. (Buon per me che non sa ch'io sono quello.) Cel. Orsù, Signore, ora a parlar mi tócca. Dott. Ora v' ascolto... Ma con sua licenza Un'altra paroletta... Cel. (Oh sofferenza!) Dott. Dirò al Dottore amico Il vostro senso espresso, Ma sappi che l'istesso Così risponderà: Chi non mi vuol, non merita Affatto il nostro amore, Ed il mio sciolto core Per simile disdetta Non se ne offenderà. (Celestina vual parlare, ed il Dottore L'interrompe.)</p>	<p>博士 あなたにはもっと良い相手がいるはずです。 チェレスティーナ どんな相手ですか? 博士 私の友人の博士で あなたを愛している。 チェレスティーナ でも、博士とは誰ですか? 博士 それは私... チェレスティーナ あなたが... どうして? 私を? <i>(軽蔑して、そして博士は混乱する)</i> 博士 それについてあなたに話すのは私の責任です。 (ああ、なんと彼女は怒っていることか!) チェレスティーナ。 その人の名前が誰なのか本当に知りたいです。 博士 怒らないですか? チェレスティーナ いいえ閣下。嬉しいです。私は笑っています。 博士 彼はファル...ファッ...博士です。 チェレスティーナ フルネームは? 博士 もう忘れました。 (騙された気分だ) チェレスティーナ 名前がわからなくても私にとっては 何も問題ではありません。 私の代わりに、その名のような博士を 厩舎に飼っていると伝えてください。 博士 博士達を? チェレスティーナ そうですね。この種は 誰も満足させませんでした。 博士 博士達が? チェレスティーナ そう言いました。 私はいつも馬鹿なことをしてしまいます。 博士 博士達に? チェレスティーナ はい、閣下。もしその人が誰なのか分かったら、 私の棒で彼を殴らせると 伝えてください。 博士 (幸運なことに、私がその人間だとは知らない) チェレスティーナ さあ、閣下、今度は私が話す番です。 博士 今私はあなたの話を聞いています... でも、許可を いただければ、もう一言... チェレスティーナ (ああ、苦痛だ!) 博士 友人の博士に あなたが表現した感情を 伝えますが、 彼は次のように答えるでしょう。 私を望まない者は 私たちの愛を受けるに値しないし、 私の自由な心は そのような不幸によって 傷つけられることはない。 (チェレスティーナが話そうとすると、博士は 彼女の話を遮る)</p>
---	--

Un'altra paroletta Sa ognuno che le femmine Sempre al peggior s'appigliano, E il merto d'un Dottore Non puote una donnetta Giammai pregiudar. Un'altra paroletta: <i>(come sopra.)</i> L'orgoglio in una femmina E' sempre disprezzabile, E non si rende amabile Colei, che si diletta Gli amanti corbellar. <i>(Parte dopo la replica presente.)</i> Cel. Guarda che seccator! Non m'ha lasciato Dir quello, ch'io voleva. S'egli torna Voglio fare arrabbiare questo allocco... <i>(Torna il Dottore.)</i> Dott. Un'altra paroletta... Cel. Siete un sciocco. <i>(Celestina parte con fretta, ed il Dottore la siegue.)</i>	誰もが知っている もう一つの小さな格言は、 女性はいつも最悪のものを 好むということ、 そして女性が博士の価値を 決して損なうことはできないということです。 もう一つの小さな格言は: <i>(上記と同じ書き)</i> 女性の傲慢さは 常に卑劣であり、 恋人をからかうことを 喜ぶ女性は 愛すべきものではありません。 <i>(この繰り返し後に退場)</i> <b>チェレスティーナ</b> この迷惑なこと！彼は私が言いたいことを 言わせてくれなかった。もし彼が戻ってきたら、 この馬鹿を怒らせたい... <i>(博士が戻ってくる)</i> <b>博士</b> もう一つの小さな格言は... <b>チェレスティーナ</b> あなたは愚か者です。 <i>(チェレスティーナは急いで立ち去り、 博士も後を追う)</i>
---	---

犬輔：博士は諦めたかのかのと思いきや、「後見人と被後見人の間に不和を引き起こすことで、いつか彼女を妻にして彼女の莫大な富を所有できると期待する」(第二幕 第 3 場) という目的でしつこくチェレスティーナに言い寄っていたんです。

### 3.2 テノール・アリア「運命は恋する者に」 K.209 の挿入先

鳥代：教授、今回の宿題で検討したのは K.210 だけではありません。テノール・アリア「運命は恋する者に Si mostra la sorte」 K.209 の挿入先も検討しました。

教授：K.210 で終わりではなかったのだね。それは興味深い。聞かせてもらおうではないか。

犬輔：K.209 は自筆譜にレーオポルトの筆跡で「75.5.19、ザルツブルク」と書かれており、K.210 と同じ頃に作曲されたと考えられます。

鳥代：私たちはむしろ同じオペラのための挿入曲として作曲されたのではないかという仮定のもとに、再び音楽滑稽劇《おしゃべり屋》を調査しました。

犬輔：第二幕 第 4 場では三人が会話し、博士はファヴォーニオの妹のイザベッラと結婚できると水を向けられます。まんざらでもない博士の自惚れ場面となります。なお、ファルファローネという名前の意味するところは「大きな蝶々」、転じて「漁色家」ですね。「もう飛ぶまいぞ、この蝶々」の歌詞にもありました<sup>注9</sup>。

ATTO SECONDO SCENA IV. D. Favonio, e detti.	第二幕 第 4 場 D. ファヴォーニオ、承前
Dott. Signor D. Favonio, non è egli vero, Che avete risoluto onninamente, Che la vostra Sorella torni in casa? (Dite sì con ardire.) <i>piano al medesimo.</i> Fav. E' ver.	<b>博士</b> D.ファヴォーニオさん、 あなたは妹 [イサベッラ] さんが帰国すべきだと 決心したのではないですか？ (大胆に「はい」と言いましょう) <i>(ゆっくりと)</i> <b>ファヴォーニオ</b> それは本当です。
[...]	[中略]
Cel. Cosa parli fra te? Dott. Vuol ch'io parli per esso? Parlerò. <i>a D. Favonio.</i> Poc'anzi disse a me queste parole: <i>a Celest.</i> Dottore Farfallone fate in modo, Che qui sen rieda tosto mia Sorella. Fav. Così sta per l'appunto; e con Luigi La voglio maritar... Dott. No, no, per questo La Signorina non se ne contenta.	<b>チェレスティーナ</b> あなたは何について話しているのですか？ <b>博士</b> 私が彼に代わって話しましょうか？ お話します。 <i>(D. ファヴォーニオに)</i> 少し前に彼はこう言いました。 <i>(チェレスティーナに)</i> 「ファルファローネ博士、 私の妹がすぐに戻ってくるようにしてください」。 <b>ファヴォーニオ</b> まさにその通りです。そして私は彼女を ルイーダと結婚させたいのです... <b>博士</b> いやいや、 だからお嬢さんは喜んでいないんです。

<p>Cel. Impostore, t'intendo. Tu vorresti Sposarti ad Isabella.</p> <p>Fav. Qual novità! Sposare mia Sorella?</p> <p>Cel. Per venire qua dentro a comandare.</p> <p>Fav. E. per fare, e disfare?</p> <p>Cel. Dottor malizioso!</p> <p>Fav. Dottor vituperoso.</p> <p>Dott. Piano non tanta furia. Date all'armi Senza alcun fondamento. Io son seguace Di Minerva, e disprezzo di Cupido L'effeminate faci. Pur se mai Dovrà Amore allignar nel petto mio. Di peregrina face il bel splendore Solo colei accenderà un Dottore. Se qualche bella mi vuole per sposo; Sappia, che in primis io sono Dottore, Son virtuoso, bel parlatore, Buon Matematico, meglio Filosofo, Poeta lirico, bravo Oratore, Gran Ballerino, suono il Violino, Canto di Musica sul Mandolino, Sono il Prototipo delli Caffè, Il meglio intingolo del conversar. Stando al Teatro nel palco, o in sedia, Benchè io non senta mai la Commedia, E mi diverta sempre a ciarlar: Pur senza intendere parole, e Musica, Senza aver letto nè men libretto, Ho la grand'arte di criticar. <i>parte.</i></p>	<p><b>チェレスティーナ</b> 詐欺師さん、聞こえますよ。 あなたはイザベラと結婚したいと思っています。</p> <p><b>ファヴォーニオ</b> それはニュースだ！ 私の妹と結婚しますか？</p> <p><b>チェレスティーナ</b> ここに来て指揮を執る。</p> <p><b>ファヴォーニオ</b> そして、実行し、元に戻すには？</p> <p><b>チェレスティーナ</b> いたずらな博士！</p> <p><b>ファヴォーニオ</b> 博士は悪者扱いされる。</p> <p><b>博士</b> ゆっくり、そんなに速くなく。 何の根拠もなく武器を取る。 私はミネルヴァの信奉者であり、 キューピッドの女々しい松明を軽蔑しています。 たとえ愛が私の胸に根づいたとしても。 巡礼者の顔の美しい輝きだけが 博士を照らすでしょう。 もしある美しい娘が私を夫として望んだら； まず、第一に私は博士であり、 徳の高い人であり、優れた話し手であり、 優れた数学者であり、さらに哲学者であり、 抒情詩人であり、優れた弁論家であり、 偉大な舞踏家であり、ヴァイオリンを弾き、 マンドリンで音楽を歌い、 カフェの原型、最高の会話の達人であることを 知っておいてください。 劇場のボックス席や椅子に座っていても、 コメディを聞くことはなく、 いつもおしゃべりを楽しんでいます。 言葉や音楽を理解していなくても、 台本さえ読んでいなくても、私は批評するという 素晴らしい技術を持っています。 (退場)</p>
---	--

犬輔：しかし、イザベラはルイージと相思相愛なのでした。一方チェレスティーナは傲慢に振る舞って、武器で居候を排除するキャラクターと、優しく振る舞って心を引き止めるキャラクターを交互に演じます。そしてスペインからの婦人に変装して財産を保全するように皆を仕向けるのです。

鳥代：K.209 を聴くとわたしには海千山千の博士のアリアではなく、ドン・オッターヴィオのような若者の歌う憧れのアリアではないか聴き取りました。このオペラに出てくる若者といえど…

犬輔：ルイージですね。

教授：その役はテノールなのかどうか。

鳥代：マントヴァ上演のリブレットによればルイージ役はアントーニオ・ソラーリ氏 Il Sig. Antonio Solari で、テノール歌手でした。

教授：では、どの場面に挿入するのが適切かね。

鳥代：はい、第二幕第 8 場です。

<p>ATTO SECONDO SCENA VIII. <i>Il Dottore, Isabella, e detti.</i></p> <p>Dott. Mia riverita Signora Isabella, Oh quanto volontier qui vi riveggio! Isab. So qual è la bontà, che per me avete. Lui. [Isabella, e il Dottore!] Chec. [Il Dottore si fa ch'è già per noi.] Dott. Ho parlato poc'anzi (a Isabella.) Di voi con Don Favonio.</p>	<p><b>第二幕 第 8 場</b> 博士、イザベラ、承前</p> <p><b>博士</b> 尊敬するイザベラ婦人、 またここでお会いできて本当に嬉しい！</p> <p><b>イザベラ</b> あなたが私に優しい気持ちなのを知っています。</p> <p><b>ルイージ</b> (イザベラと博士だ！)</p> <p><b>ケッコ</b> (博士はすでに私たちのところにいる)</p> <p><b>博士</b> 少し前にあなたのことを (イザベラに) ドン・ファヴォーニオに話しました。</p>
--	---



<p>Isab. Di me? Dott. Certo: v'ho chiesta per consorte, E lui me n'ha già fatta la promessa. Lui. (Che ascolto mai!)</p> <p>Chec. (Come può esser questo!)</p> <p>Isab. Non credo...</p> <p>Dott. Sì, credetelos. (il Dottor l'interrompe.) Tant'è mia riverita Signora Isabella. Egli è vero però Che il Signor Don Favonio S'ha riferbato di parlare a voi Per il vostro consenso.</p> <p>Isab. Dunque...</p> <p>Dott. Ma io sto certo, Che voi glie lo darete...</p> <p>Isab. L'assenso mio...</p> <p>Dott. Senz'altro, o mia Signora. Lo leggo in quei begli occhi Ridenti, che per me son stelle fisse.</p> <p>Lui. [Moro di gelosía! Senti, è sicuro (a Checco.) Del consenso di lei.]</p> <p>Chec. [Se questo è vero io più non credo a Donne.]</p> <p>Dott. Sì, v'intendo. Dirmi volete ch'io Or vada a Don Favonio, e sbrigar facci Il nostro Sposalizio? Per obbedirvi volo a precipizio. (parte in fretta.)</p> <p>Isab. Che matto! E qui Luigi...</p> <p>Lui. Adunque tu il Dottore sposerai Contro la fe, che all'amor mio giurasti?</p> <p>Isab. Quai rimproveri acerbi!</p> <p>Lui. Se il Dottore Tu ricusar volevi, Ch'eri promessa a me dirgli dovevi. Ma perchè sei volubile, e sleale, Col silenzio le fiamme sue gradifti, E spergiura, e infedele mi tradisti.</p> <p>Si mostra la sorte propizia all'amante che prova costante ardire in amor. Ma sempre nemica e pronta all'offese distrugge l'impresse d'un timido cor.</p>	<p>イザベッラ 私のことを？</p> <p>博士 もちろんです。私はあなたを妻として頼み、 彼はすでに私に約束してくれました。</p> <p>ルイージ (一体何を聞いているんだろう！)</p> <p>ケッコ (こんなことがあるのか！)</p> <p>イザベッラ 信じられない...</p> <p>博士 はい、信じてください。 (彼女を遮って) その通りなのです、 私の尊敬するイザベッラ様。 しかしながら、ドン・ファヴォーニオ氏が あなたの同意を得てあなたと話す権利を 留保していることは事実です。</p> <p>イザベッラ それで...</p> <p>博士 でも、きっと 彼に同意してくれますね...</p> <p>イザベッラ 私の同意は...</p> <p>博士 はい、女主人様。 私にとって恒星である あの美しい笑顔の瞳でそれを読みました。</p> <p>ルイージ (嫉妬死しそうだ！ ほら、彼は (ケッコに) 彼女の同意を確信している)</p> <p>ケッコ (これが本当なら、私はもう女性たちを信じない)</p> <p>博士 はい、分かりました。 今からドン・ファヴォーニオのところに行って 結婚式の準備をしましょうか？ あなたに従って急いで参ります。(すぐに立ち去る)</p> <p>イザベッラ 馬鹿げています！ そしてルイージがここに...</p> <p>ルイージ あなたは私の愛に誓った信念に反して 博士と結婚するつもりですか？</p> <p>イザベッラ 何という痛烈な非難でしょう！</p> <p>ルイージ 博士を拒否したかったのなら、 私に約束したことを博士に 伝えるべきだった。 しかし、あなたは気まぐれで不誠実であるため、 彼の炎を黙って受け入れ、 偽証し不誠実に私を裏切ったのです。</p> <p>好意的な運命は 恋愛において 常に勇気を示す恋人 [女性] に、 姿を現わす。 だが、[好意的な運命は] いつも 侮辱に対して敵対的で、 準備万端であり、 曖昧な心の企てを破壊する。</p>
---	--

K.209

(parte.)

(退場)

犬輔：第 1 節はルイージが恋人 la amante すなわちイザベッラに博士を拒否する勇気を持ってほしかったと歌い、第 2 節はイザベッラの「曖昧な心の企て＝浮気」を侮辱と捉え、好意的な運命がその企てを破壊してくれるだろうと歌っているんです。

鳥代：K.209 は運命任せで弱気なのね。でも希望を捨ててはいません。

教授：それはともかく、K.210 と同様 K.209 もオペラ・ブッフアへの挿入アリアだと考えていいのだね。

鳥代：いいえ、K.209 は代替アリアです。つまりこの第二幕第 8 場におけるルイージのレチタティーヴォの後ろにはすでにアリアがあったのです。例えば 1764 ボローニャ版は以下のとおりイザベッラに皮肉で怒りをぶちまけています。

<p>Lui. Se il Dottore Tu ricusar volevi, Ch'eri promessa a me dirgli dovevi. Ma perchè sei volubile, e sleale, Col silenzio le fiamme sue gradifti, E spergiura, e infedele mi tradisti. <b>Io non so dir se sei Più lusinghiera, ò ingrata; Sotto un bel volto, o Dei, Celi la più spietata Barbara crudeltà.</b> (parte.)</p>	<p><b>ルイージ</b> 博士を拒否したかったのなら、 私に約束したことを博士に 伝えるべきだった。 しかし、あなたは気まぐれで不誠実であるため、 彼の炎を黙って受け入れ、 偽証し不誠実に私を裏切ったのです。 <b>あなたがお世辞を言うのか、 恩知らずなのか、私には分かりません。 ああ神よ、あなたは美しい顔の下に、 最も容赦のない野蛮な 残酷さを隠しています。</b> (退場)</p>
---	--

犬輔：1765 ウルビーノ版<sup>注10</sup>では次のとおりアリアに気丈な第 1 節が追加されています。

<p>Lui. Se il Dottore Tu ricusar volevi, Ch'eri promessa a me dirgli dovevi. Ma perchè sei volubile, e sleale, Col silenzio le fiamme sue gradifti, E spergiura, e infedele mi tradisti. <b>Se in seno ancor mi resta, Un barbaro tormento, Se i totti miei io sento Saprò ben io parlar. Io non so dir se sei Più lusinghiera, ò ingrata; Sotto un bel volto, o Dei, Celi la più spietata Barbara crudeltà.</b> (parte.)</p>	<p><b>ルイージ</b> 博士を拒否したかったのなら、 私に約束したことを博士に 伝えるべきだった。 しかし、あなたは気まぐれで不誠実であるため、 彼の炎を黙って受け入れ、 偽証し不誠実に私を裏切ったのです。 <b>もし野蛮な苦しみ まだ私の胸の中に残っていても、 もし私が悲しみを感じていても、 私は上手に話す方法を知りましょう。 あなたがお世辞を言うのか、 恩知らずなのか、私には分かりません。 ああ神よ、あなたは美しい顔の下に、 最も容赦のない野蛮な 残酷さを隠しています。</b> (退場)</p>
---	---

鳥代：わたしたちが参照してきた 1767 マントヴァ版では諦めのアリアとなっています。

<p>Lui. Se il Dottore Tu ricusar volevi, Ch'eri promessa a me dirgli dovevi. Ma perchè sei volubile, e sleale, Col silenzio le fiamme sue gradifti, E spergiura, e infedele mi tradisti. <b>Parto crudel se vuoi, M'involò agli occhi tuoi, Vado a morir d'affanno Lungi ben mio da te.</b> (parte.)</p>	<p><b>ルイージ</b> 博士を拒否したかったのなら、 私に約束したことを博士に 伝えるべきだった。 しかし、あなたは気まぐれで不誠実であるため、 彼の炎を黙って受け入れ、 偽証し不誠実に私を裏切ったのです。 <b>あなたが望むなら、私は残酷なまま去り、 あなたの目から飛び立ち、 愛しいあなたから遠く離れて 苦しみ死んでいきます。</b> (退場)</p>
--	---

犬輔：思うにルイージのこの状況にピッタリのアリアを作曲するのが先人たちにとって難しかったということになるのでしょうか。モーツァルトが参照したとすればどの版のリブレットであったのか不明ですが、代替アリアを試みた理由は先人のアリアが出来なかったからでしょう。

鳥代：K.209 がオペラ・ブッフア向けとしては聴かせどころのある曲となっているのはモーツァルトが勝負に出たからと言えるでしょうか。

犬輔：ではオペラの最後の場面を見ておきましょう。

SCENA ULTIMA. Tutti.	最後の場面 全員。
<p>Isab. Celestina son pronta a darti il tuo, Ed andrò via se vuoi. Lui. Celestina ti cedo i miei poderi, Per soddisfarti il credito, ch' hai meco, Chec. Io, che niente non ho per dare a voi Quel compenso, che vuole la ragione, Da me stoffo men vado alla prigione. Cel. Non son tanto tiranna Quanto voi mi credete, Io solo volli Far valer la ragion, che m' assisteva. Di far male a nessun io non m'intendo. Dott. Oh generosa!</p>	<p><b>イザベッラ</b> チェレスティーナ、私はあなたにあなたの財産をお返しします。お望みなら、私も立ち去ります。 <b>ルイージ</b> チェレスティーナ、私はあなたに私の財産を差し上げ、私が負っている借金を返済します。 <b>ケッコ</b> 理性が要求する補償を あなたに与えることができない私は、 一人で牢獄に行きます。 <b>チェレスティーナ</b> 私はあなたの方が思っているほど 暴君ではありません。ただ私を支えてくれた 理性を主張したかっただけです。 誰かを傷つけるつもりはありません。 <b>博士</b> ああ、寛大な方！</p>

<p>Giu. Oh grande! Cel. Voglio ancora, Per far compita l'allegrezza insolidum, Che Luigi si sposi ad Isabella, Ed il Dottore, a Giulia. Lui. Oh me felice! Isab. Oh lietissimo giorno! Dott. Giulia accetti la mano, ed il mio amore. Giul. Vi dono unito colla mano il core. Cel. E voi Signor Dottore ora imparate, Che se le vostre idee Non ebber quell'effetto, che bramaste, Ne fu sola cagione L'esser voi solennissimo Ciarlone. Tutti. Viva viva il gran Ciarlone, Che con suoi vani ragiri Il Tutore, e la Pupilla Fece alfine trionfar.</p> <p><i>Fine del Dramma.</i></p>	<p>ジュリア ああ、素晴らしい！ チェレスティーナ また、連帯の喜びを完結させるために、 ルイージはイザベッラと、 博士はジュリアと 結婚してほしいです。 ルイージ ああ、私は幸せ者だ！ イザベッラ ああ、この上なく幸せな日！ 博士 ジュリアは私の手と愛を受け入れます。 ジュリア 手と共に、私の心をあなたに捧げます。 チェレスティーナ そして、博士、もしあなたの考えが 望んだ効果をもたらさなかったとしても、 それはあなたが非常に厳粛な おしゃべり屋だったからに他ならないことを、 あなたは今や悟ったのです。 全員 偉大なおしゃべり屋よ、 その軽薄な策略によって、 ついに後見人と被後見人を 勝利に導いた、万歳。</p> <p><i>ドラマの終わり。</i></p>
---	---

鳥代：ルイージはイザベッラと元の鞘に納まったんですね。

犬輔：おしゃべり屋とは博士のことでした。博士は結局ファヴォーニオの親戚のジュリアと結ばれて、めでたしめでたし。博士 Dottore は狂言回しだったのです。

#### 4. まとめ

鳥代：テノール・アリア「従いかしこみて」 K.210 がニコロ・ピッチンニのブッフア作品《うかつな男または幸運な賭博師》への挿入アリアであるという従来説はテノールのアリアであることと矛盾するため成立しません。そこでアントーニオ・パロンバ台本・ジョヴァンニ・パイジエッロ作曲の音楽滑稽劇《おしゃべり屋》の第一幕第 4 場の博士が歌う挿入アリアに相当するのではないかという案を提起しました。

犬輔：テノール・アリア「運命は恋する者に」 K.209 が K.210 と同じオペラへの挿入／代替アリアであるという従来説は根拠のあるものではありませんでしたが、偶然にも同じ音楽滑稽劇《おしゃべり屋》の第二幕第 8 場のルイージのための代替アリアとする案がピッタリであることを確認できました。

教授：モーツァルトが二人のテノール歌手のために挿入／代替アリアを一曲ずつ作曲したという前例はないが、かと言って全くあり得ないことではない。面白くて価値ある議論だった。諸君たちには、さらに研究を進めることを期待する。

注 1：野口秀夫：テノール・アリア「従いかしこみて」 K.210 —— 対応するオペラを調査する（その 1） ——、神戸モーツァルト研究会 第 322 回例会 ∞

注 2：Il ciarlone. Dramma giocoso per musica di Antonio Palomba napoletano da rappresentarsi nel Teatro Marsigli Rossi nella corrente primavera dell'anno 1764. Dedicato alle nobilissime [...] Dame di Bologna. - In Bologna : per Ferdinando Pisarri, [1764], Sartori 1990 05544 ∞

注 3：野口秀夫：モーツァルトのノットゥルノ K.346 (439a) & K.439 の見出された台本作者たち、神戸モーツァルト研究会 第 276 回例会 ∞

注 4：Goldoni, Carlo (1757). La pupilla ∞

注 5：La pupilla. Commedia per musica di Antonio Palomba napolitano da rappresentarsi nel Teatro de' Fiorentini nel carnevale di quest'anno 1763. - In Napoli : per Vincenzo Mazzola-Vocola, 1763, Sartori 1990 19337 ∞

注 6：Opera buffa in Wien (1763–1782), FWF – Forschungsprojekt, Oper: Il ciarlone ∞

注 7：Il ciarlone. Dramma giocoso per musica di Antonio Palomba napoletano da rappresentarsi nel Regio-Ducal Teatro Vecchio di Mantova il carnevale dell'anno 1767. Dedicato al merito [...] delle nobilissime dame di detta città. - Mantova: erede di Alberto Pazzoni, [1767], Sartori 1990 05554 ∞

注 8：音楽滑稽劇《おしゃべり屋》ナポリ出身アントーニオ・パロンバ作、マントヴァ王立公爵劇場、1767 年のカーニバルにて上演 ∞

注 9：野口秀夫：『もう飛ぶまいぞこの蝶々』を例に日本語歌詞を考える、神戸モーツァルト研究会 第 254 回例会 ∞

注 10：Il ciarlone. Dramma giocoso per musica di Antonio Palomba napoletano da rappresentarsi nel Teatro de' nobili signori Pascolini d'Urbino nel carnevale dell'anno 1765. Dedicato al [...] signori Accademici Pascolini. - Urbino : Stamperia Camerale, 1765. Sartori 1990 05549 ∞

(作成：2025 年 5 月 27 日、改訂：2025 年 10 月 4 日)